ベトナムにおける新型コロナ感染症（COVID-19）対応への一考察

大阪大学接合科学研究所
特任准教授　勝又美穂子
2021 年 1 月

今回、当研究所ベトナムオフィスに滞在し、ベトナムにおける COVID-19 への対応から見えたベトナムらしさ及び国民性に関する筆者の主観を交えた一考察を述べたいと思う。なお、本件についてはできる限り居住地区、立場の異なる多様なベトナム人からのヒアリングを行う等、広範な情報から総合的に考察するよう心掛けたが、専門的な調査を行ったものではないので、一部情報の偏りは否定できないことをご理解頂きたい。また、大前提としてベトナムは社会主義国家であるため、国の政治体制、社会の構造には特殊性があることもご理解頂きたい。

まず、COVID-19 に関するベトナムの状況を見てみる。現地日本大使館によると、2021 年 1 月 11 日現在でベトナム国内における累計感染者数（陽性者数）は 1,514 件、死者数 35 人[1] となっている。ベトナムへの帰国者、新規入国者から陽性者の確認は現在もあるものの、1 月 11 日現在で市中感染の報告は無しである。ベトナムでは 2020 年 11 月より日本とのビジネストラックが再開されている。現地到着後は全ての入国者に対し、ベトナム政府指定機関（集団隔離施設、あるいは指定宿泊施設）における 2 週間の隔離措置が厳格に実施されており、隔離期間中の管理・監督も徹底されている。隔離場所についてはランクや金額により選択可能となっているが、こうした隔離施設と渡航の手配については一つのパッケージとして扱われ、現在では一般的に民間業者による手配が行われている。なお、留学生等ビジネス以外でのベトナムへの入国については、現時点では開始が確認されていない。基本的に 2020 年 4 月末に終了した全国社会的隔離措置（外出規制）以降、2 か所で市中感染が確認された一部関係地域以外は国内における教育・経済活動については通常通り行われている。

次に、ベトナムにおけるこれまでの COVID-19 対策について見ていきたい。2020 年 1 月中旬、中国での感染拡大が報道されたのは旧正月（テト）開始前であった。ベトナムでは、この感染報道後即時に中国と接する国境が全て封鎖となった。また、2 月上旬、通常であればテト明けから再開される学校もそのまま休校が決まった。その時点では、外出規制等の措置は出ておらず、中国との国境封鎖に次いで全国の休校措置が一早い対策として取られた。その後、3 月末頃から 1 カ月程度、全国における「社会的隔離措置（外出規制）」の厳しい対応が開始され、食品・日用品業、金融機関、生花店、及び医療機関以外は全て活動休止となった。社会的隔離措置は 1 カ月程度で解除されたが、休校は 5 月上旬まで継続された。それ以降、中部地域と南部地域で部分的な市中感染が 2 度程発生したが、いずれも強力な封鎖と検査、隔離対応により、拡大には至らず感染を封じ込めている。

その他、ベトナム政府が行った主に 3 つの具体的な対応を見てみたい。1 つ目に、PCR 検

査場所の迅速な設置である。2020 年 4 月上旬時点ではベトナム全土で 111 カ所の検査所が指定されており、検査能力は 1 日に 1 万 3 千件と伝えられていた[2)]。ベトナムは山岳地帯も多いが、そうした遠隔地にも検査所が設置され検査体制の充実が図られることで、感染者の早期発見に力が注がれた。参考までに日本では同時期 3 月時点で、1 日 6160 件の検査が可能[3)]と伝えられている。なお、ベトナムでは陽性者（F0）との接触状況により F1（濃厚接触者）から順次 F3 までのレベル分けが行われ、各レベルで異なる措置が適用される。次に、罰金対策である。社会的隔離期間中は、マスクの着用と外出人数の制限が通達され、これらを遵守しない場合には罰金が課された。厳密にどこまで取り締まれていたかは筆者も定かではないが、この期間町から殆ど人の姿が消えていたのは事実である。3 点目に、政府からの国民への注意喚起の発信である。初期、ベトナム国内でも市中感染が確認されていた時期には、連日何通もの「手洗い・うがい・マスク・社会的距離の確保」等を推奨するメッセージがベトナム保健省から直接個人の携帯電話メッセージ、あるいはベトナムで最も利用者数の多い SNS、Zalo を通じて手元に届き、感染者が確認された場合には感染地区等の細かな情報も配信された。感染症の恐ろしさ、家族を守る大切さについても頻繁に配信が行われた。時には国民の団結を仰ぐようなメッセージが首相名で届くこともあり、例えば「あなたたち国民は一人一人が病気と最前線で戦う兵士なのです」等の文言があったことを記憶している。

ここで休校措置についてもう少し詳しく触れたい。全国一斉休校は上述の通りテト休暇から継続する形で 2020 年 2 月上旬から 5 月上旬の実に 3 か月近くに及んだ。注目したいのは、特に都市部のオンライン授業への切り替えの早さであった。都市部でも学校により差があったことは勿論であるが、一つの小学校を例にとると、休校開始後、2 月 15 日からは簡易的なシステムを利用したオンライン授業が開始されており、その翌週からは Teams を利用した本格的なオンライン授業が行われている。手探りの状態でもひとまずオンライン授業を開始し、実施しながら修正、整備した、という印象である。地方ではネット環境の問題等から、オンライン授業は実施が試みられた地域もあるものの長期的には行われず、SNS 等を通して学校から届く課題に生徒が取り組む、テレビの教育番組を活用する等で対応されていたようである。ベトナムでは共働きが一般的であるが、休校期間中多くの家庭では、祖父母や親戚等による連携体制で対応していたようである。日本では学校の再開が待ち望まれたが、筆者のヒアリングによるとベトナムの場合、政府の休校規制が緩和された後も、学校の再開には慎重な意見も多かったようだ。上記と同様の現地小学校を例にとると、政府の休校措置緩和が検討され始めた頃に登校再開賛否について保護者アンケートが実施された際、80%を越える保護者が再開には不安がある、と回答したようである。学校が再開された後にも、保護者の判断で欠席を継続した生徒もいたようだ。休校で遅延した学習内容については夏休みを大幅に削り対応され、学校によってはその後も週末の登校を増やす等で取り戻していた。

これら一連の対策を通して、ベトナムでは COVID-19 の感染拡大防止に現時点では成功し

ていると言える。最初に述べた政治体制や社会構造の特殊性を差し引いたとしても、特筆したいのは、ベトナム政府の感染症への危機意識の高さと、ベトナムの国民性が相乗効果をもたらしたと考察できる点である。ベトナム政府は 2003 年に SARS 対応の経験を有する。中国では当時 SARS の感染拡大が未だ正式に報告されていなかった時期、ベトナム・ハノイの一つの病院でこれまで未確認の肺炎が流行し、当地に研究者として滞在していたイタリア人医師カルロ・ウルバニ氏（2003 年 3 月 SARS 感染により他界）が診療と調査にあたり世界で最も早くこの感染症を SARS として WHO に報告し、国内での感染拡大を一早く食い止めた[4] 経験を有している。感染症の脅威や危機感をベトナム政府は実感として持っており、COVID-19 に対する早期抑え込みの重要性を認識していたと言える。一方、国民に目を向けると、COVID-19 対応において、不便さへの耐性、柔軟性、そして全体を通して命を失うことへの危機感が効果的に働いたものと感じた。ベトナムの生活では日常的に不便さが残っている。欲しい物もすぐには手に入らず、野菜や果物も季節に依存する。交通手段も限られ、交通事情も良いとは言えないため物理的に行動の自由が制約されることも日常的に多々ある。手間と工夫が必要な生活様式が当たり前に残ることから、ベトナム人の不便さへの耐性は高く、COVID-19 対策で余儀なくされた不便な生活へもその耐性を発揮したと考える。不便さの裏返しとも言えるが、ベトナム人は一般的に柔軟性も高い。日常的に一定の方法に固執することなく臨機応変に対応する術を心得ている。最後に、ベトナム全体の意識として、大勢の命が危険にさらされることへの強い危機感や恐怖心、特に若い命を守ることへの高い意識があると感じている。学校休校措置が一早く取られた点等も併せた筆者の個人的分析であるが、そこにはベトナム戦争経験が関係しているのではないかと考えている。戦時中あるいは終結直後に生まれた世代でも未だ 40 代であり、ベトナム戦争で多くの命を失った記憶は例え 20 代の若者であっても親戚や家族を通して残っている。今回の COVID-19 対応においても、この危機感は政府及び国民双方に共有され、作用したのではないだろうか。

以上のように、非常事態である COVID-19 対応においては、ベトナムにおける高い危機意識と政府の迅速な対応、そして国民性が有機的に合致することで、感染症対策として成功しているのだと考えている。COVID-19 がグローバル化した現代で急速に拡大した感染症であるからこそ、各国の体制、構造、規模は大きく異なるとはいえ、視野をグローバルに持つことで学べる事が多くあるのではないかと改めて感じるのである。

＊本考察は 2021 年 2 月グローバル人材育成教育学会全国大会招待講演として考察したものである。

引用・参考文献

1) 在ベトナム日本国大使館ウェブサイト. (2021.01.11). 新型コロナウィルスに関する諸動向. https://www.vn.emb-japan.go.jp/itpr_ja/corona_information.html（最終閲覧日:2021 年 1 月 11 日）

2) Viet Jo 配信記事. (2020.04.21). ベトナム PCR 検査の 1 日実施可能件数は 1.3 万

人. https://www.viet-jo.com/news/social/200421135003.html（最終閲覧日:2021年1月11日）

3) 経済新聞社配信記事.（2020年3月10日）. 新型コロナ検査可能数、都道府県により1日20～190件. https://www.nikkei.com/article/DGXMZO56639790Q0A310C2CC1000.（最終閲覧日：2021年1月11日）

4) ウィキペディア・フリー百科事典.（2020.04.29）. カルロ・ウルバニ. https://ja.wikipedia.org/wiki/カルロ・ウルバニ.（最終閲覧日：2021年1月12日）